

<随想>表現と内容

佐川, 誠義 / SAGAWA, Masayoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

180

(終了ページ / End Page)

181

(発行年 / Year)

1987-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019507>

表現と内容

もう二年以上も前のことになるが、ほぼ同じ題材を扱いながら主題がまったく異なる二本のアメリカ映画をたてつづけに見て、考え込んでしまったことがある。ひとつはローランド・ジョフェー監督の「キリング・フィールド」であり、もうひとつはジョージ・イングランド監督の「醜いアメリカ人」である。

「キリング・フィールド」のほうは公開当時日本でも話題になったので、ご覧になった方が多いと思うが、アメリカ人があるカンボジア人を動乱から救い出すという話である。この映画を見て私がまず感じたのは、愚かなアジア人どうしの紛争からアジア人を救い出し得るのはアメリカ人であるといった鼻もちならない白人優先の意識のいやらしさであった。ところが、その思想的な反発にもかかわらず、映画はたとえようもなく美しかった。大きく輪をえがきながら被写体のまわりをパンしつづけるカメラの動きのもたらす耽美的な映画的な興奮は、今もなまなましく感じることができるところである。アメリカに一足先に去った主人公（アメリカ人）が、カンボジアに残してきたカンボジア人を思いつつ苦悩する場面も、実に感傷

佐川誠義

的ながらも感動的である。そのときに流れるのは何とプッチーニの「トウランドット」の王子が恋人を思って歌う最名なアリアなのであるが、これまた決まっていると一言わざるを得ない。私は映画のテーマはいやだいやだと思いつつながら、最後には、眼がうるむのおさえることができなかった。

一方、「醜いアメリカ人」のほうは、同じアジアにおけるアメリカを描いたものでありながら、その題名が示唆するように、正反対の内容をもつ。アジアにおけるおごれるアメリカ人を徹頭徹尾自己批判した作品で、その謙虚さ、誠実さには正直言って頭がさがる思いがする。ところが、映像のほうは平凡きわまりなく、少しも説得力をもっていない。たとえば、この映画の中の一場面でさえも愛着をもって思いうかべることはできない。

この二つの作品のうち、どちらか一方を選べと言われたら、いったいどちらのほうがいいのだろう。主義主張が立派だということ、「醜いアメリカ人」をとらなければならぬのだろうか。いや、私はそうしたくないのである。映画は芸術である。芸術である以上、美

を表現していなければならぬ。この点で「醜いアメリカ人」は失格である。映画における美をどう定義したらよいのか、単なる視覚的なものに還元してしまうのはゆきすぎだろうが、少なくとも映像は最も重要な部分であることに間違いはない。従ってテーマが立派だというようなことは、映画における美に直接貢献しているとは言えない。あのテーマのあの程度の表現は、他の媒体、たとえば文章などによっても十分可能なのだ。映画という手段を選んだ以上、映画でなければ表現できないようなものを含んでいなければならぬのではないか。

その点、「キリング・フィールド」は実に魅力的な映画的な美にみちている。その美はたとえば文章などによっては絶対に表現できないようなものである。従って、映画的な視点からは、「醜いアメリカ人」より優れている。というより、この二つを比べること自体が「キリング・フィールド」に対して失礼になるほどの差がある。

このようなことを持ち出したのは、文学においても、おなじような内容（主題）と表現（手段）の対立があると思うので、この問題を、門外漢の立場から話題にしてみたからである。

文学における表現は当然言語である。言語は、人間のもっている表現手段のなかでは、もっとも一般的なものであり、いわば当たり前のものである。そのため、ややもすると他の芸術の手段（音と色）に比べると客観化しにくいきらいがある。この理由で、表現イコール内容というような短絡した考えが一般的になっても、それがおかしいということがなかなか気付かれない。この際つねに内容（テーマ）のほうに重視され、表現のほうは二の次ということになる。

より具体的に言うなら、良いテーマを扱った作品なら、表現における優劣はあっても、とにかく良い作品であるといった風潮があるのではないか。もし本当にこれが正しいなら、良い作品を生み出すには、良いテーマを選びさえすればよいことになってしまう。例えば、人種差別反対というテーマはまず疑いもなく正しい考えであろう。従って、このテーマに従って書かれた作品はすべて良い作品ということになってしまう。

私はこのような考え方には断じて反対である。^(注)立石氏が思想と文学の関係について述べられていることは、この点で興味深かった。氏の論旨を私なりのことばで整理しなおしてみると、虚構という文学形態は思想とは独立した価値をもちうるということになる。ある思想が虚構という形式をとるときは、そこには文学的な必然性がなければならぬ、すなわち政治論文などによって取り換えがきくようなものであってはならない。氏の文をこのように解釈することはいきすぎになるのだろうか。私はこの種の文章をつづるのが苦手なので、興味のある方はヴァレリーの「詩と抽象思考」を読んでいただきたい。

芸術における間違ったテーマ優先の思想は、そのテーマが現実の中で意味を失ってしまった場合、そのテーマを扱った過去の作品が単なる残骸になってしまった場合、すぐれたテーマを扱ったという歴史的な視点から、評価し続けることを強要することになるのではないか。このような状況からは、真の古典は生まれにくくなるのではないか。もっとも芸術の表現そのものを、美を考察しなければならぬ。

(注) 『誌要三四号』所収